

## 航空通信兵

太平洋戦争終戦前、当時国民の三大義務という、国民が守らなければならぬ事があった。

教育、納税、兵役の事である。尋常小学校六年間が義務教育で殆どは尋常高等小学校二年まで進む。私達は八年間が義務教育と思つて居たが、高等科に行かなかつた人が居たから、判らない。

兵役は、男子が二〇才になると徴兵検査に年一回集められ、身体検査を行われる。身長、体重、目、耳、男の大切な所を握つて引つ張る、総て検査される。検査官は軍人だ。

一番立派な体をしているのが、甲種合格、その下が第一乙種合格、第二乙種合格と続く。貧弱な体をしている者、病氣勝ちは丙種不合格で兵役免除だ。私は第一乙種合格。兄二人は甲種合格だった。頭の優劣は関係なかつたようだ。

昭和十九年十二月一日、静岡県浜松市近郊の浜松航空隊に入営した。入営して三ヶ月は一期検閲といつて、軍人として初歩を教え込まれる期間だ。そして一番辛く人生の悲哀を感じる時だ。

五十人位で内務班を結成、班長は伍長、古兵が四、五人一室で寝起きする。一人が何か失態をやらかすと、初年兵全員ビンタの嵐だ。共同責任というやつだ。力任せにゲンコツで頬を殴る。二、三メートル位吹っ飛ぶ。何から何まで古兵の顔を窺つて行動するようになる。軍隊は規律正しいが、萎縮した人間が出来上がると思われぬ。

私は、毎日トンツの練習だったが、時々小銃持つて訓練に出かける事もある。夜中の訓練の時、収穫を終えた大根畑で、伏せ前進したとき、大根の乾いた切れ端が手に触った。暗くて誰の眼にもふれない、無意識に口に入れた。あの時の美味しかった味が今でも思い出されられる。

入隊したときの体重が、一、二カ月後には、五キロ十キロ全員減っている。あまり減りすぎた者は連兵休になり、二、三日内務班で床の中だ。

食料不足の時代だ、軍隊ばかりではない。全国民が飢えていた

時代だったから、満足なものを食べさせられなかった。

静岡県はミカンの産地だ、時々ミカン一、三個の配給がある。誰も、皮を剥かないで、そのまま噛み付く。

十二月に入隊し、一期検閲の三ヶ月は一番寒い季節だ、通信術教室は窓ガラスが割れて、風がピユウピユウ入ってくる。それに体を動かさないので、冷え込む。時々（天付き体操）をやり、少し体を温め、ペンや電鍵を握る。

他所の班で、例の切磋琢磨で、薄氷の張った用水池に飛び込ませられた初年兵の一人が、死亡したと噂に聞いた。

三ヶ月が過ぎ各地の部隊に配属になり、訓練を受ける。私は壬生飛行場近辺の、廃校になった小学校を本隊にしている部隊に配置になった。

一緒に入営した半数が内地で、残りは台湾行きの輸送船に乗り、現地向った。途中敵の魚雷攻撃を受け、全員戦死したと、聞かされた。

五月頃から東京近辺の松戸飛行場で訓練を受けた。軍隊は何もかも平等であった。酒も煙草も、飲む飲まないの区別が無い。酒は戦友に飲ませ、煙草はためて置いた。松戸に居たとき二日間の休暇が出たので、ためて置いた煙草を父のお土産にし生家に帰った。父はヨモギを乾燥、紙で巻きタバコのように作り飲んでいたので、喜んでくれた姿が目に見えなかつた。

七月になって本隊に帰った。終戦間際で空襲が激しくなつたある日、壬生飛行場が空襲を受け、「空襲、空襲」の掛け声で一斉に地に伏した。間隙を置かず、グラマンの機銃掃射をうけた。

低空で飛び去る米機の操縦者が、墨絵のように見えたのが、今でも目に張り付いている。その時自動車の下に避難した戦友が、一人、車を貫いた弾丸で戦死した。

壬生本隊で終戦、九月一日、二日ばかりで生家に辿り着いた。軍服姿の写真が一枚もない。軍服の胸あたりには航空兵の区別が付く翼の縫込みがあつた。無くしたのか、撮らなかつたのか思ひ出せない。